

【教員寄稿】

「なんでポルトガル語?」、「なんでブラジル?」～外の世界を学ぶ楽しさと目的

二宮康史

「なんでポルトガル語?」、「なんでブラジル?」。この問いはこれまでの大学以降の人生の節目で、幾度となく繰り返されたものである。おそらく学科の新入生諸君は、(途中で辞めなければ)少なくともあと4年間は繰り返し聞かれる質問となるであろう。私は93年に上智大学外国語学部ポルトガル語学科に入学し、97年に日本貿易振興機構(ジェトロ、当時は日本貿易振興会)に就職、現在はジェトロ・アジア経済研究所でブラジルの地域研究を行っている。私の場合、この質問を受けるようになって20年の歳月が過ぎたことになる。

皆さんの参考として、私がこの問いにどのような答えをしていたかをここで紹介したい。最初にこの問いを受けたのは大学入試の面接時である。その当時の私の答えは、「ポルトガルはヨーロッパの小国でありながら、15世紀という早い時期に未開の新大陸を目指した姿にあこがれを抱き関心を持ったからです」と、高校の世界史の教科書を丸暗記したかのような回答をしたように記憶している。その回答に共感を得られたかは定かでないが、私は無事学科への入学を果たした。そして次に問いを受けたのは3年次のブラジル留学に向けた選抜面接の時である。ブラジル人の教官から冒頭に質問を受け、次のように答えた。「ブラジルという国は多様性が認められる国です。多彩な民族・文化が根付き、広大な国土を背景に気候や風土も多様。この多様性を学ぶためにブラジルに留学を希望しました」と、日頃の授業で得られた知識をフルに活用し答えたと記憶している。ところが教官の反応をうかがうと、やや怪訝な表情をしている。どうしたのか不審に思うと、教官は口を開き、「留学動機としては立派な回答です。ただ私は、あなたは何歳ですか?と聞いただけなのですが、、、」と衝撃の事実を語った。この面接はポルトガル語で行われたこともあり、私も緊張したのであろう。最初の質問は留学動機を聞かれるはずだという思い込みもあり、ちゃんと質問を聞き取らず一気に答えてしまったのだ。その後の面接はしどろもどろとなり、絶対に落ちたと思った。しかしふたを開けたらめでたく「合格」、この時ほど日頃の授業をまじめに受けておいてよかったと感じた時はなかった。

さて、次に問われる機会は就職活動時である。1996年3月にブラジル留学から帰国、すぐに就職活動が始まった。私は海外に行ける仕事という線で職を探し、商社、メーカー、政府系機関を中心に回った。就職活動における私の強みはブラジル留学である。当然その話題となり、「なんでポルトガル語?」、「なんでブラジル?」という問いがかけられ、次のように答えた。「昔から海外に行きたいという希望が強いなかで、先進国ではなく途上国のほうが新しい発見があるのではないかと、そういう問題意識のなかでブラジルを選びました。もちろん途上国のなかにはアジアやアフリカもあります。しかし新大陸として多様な民族が共生し広大な国土と豊富な資源を背景に発展を目指すブラジルという国に深く興味を抱いたためです」と、これまでの回答をまとめたような、もっともらしい答えをした。しかし、就職活動では単にその質問で終わるわけではない。面接官からは「ブラジルで何を学んだのか?」、「その経験を社会人としてどう活かしたいのか」など、その次の質問が飛ぶ。つまり「なぜポルトガル語?」、「なぜブラジル?」という問いはある意味で前座でしかなく、そのあと「あなたはそれを学んでどうしたいのか」というところが主な問いかけであった。本冊子の目的は就職活動ではないため、ここでは私の答えを詳述しない。しかしここで申し上げたいのは、「ポルトガル語という言語、ポルトガル語を話す国・地域について学ぶ」ということは最終的な「目的」ではなく、目的に至る一通過点、あるいは手段であるということだ。

私はジェトロに入った後、2003年～2007年までサンパウロに駐在し、現在はブラジルの経済、産業、企業を対象とした地域研究を主たる業務としている。ポルトガルの大航海時代やブラジルの多様性、途上国としての発展性など学科で学んだ知識はもちろん今の仕事につながっている。しかし過去を振り返る中で私の基礎になったのは、知識よりむしろ、ブラジルをはじめとした諸外国を学ぶことを通じて得られた経験や人とのつながり、その中で得られた「楽しさ」であったように感じている。私が今の仕事に携わっているのも、ブラジルという国を通じて外の世界を知ることの魅力を知り、仕事を通じてその「楽しさ」を実現したいという思いがモチベーションになっている。皆さんは上智大学に入学したことで外の世界を知る入り口に立った。ポルトガル語圏を学ぶことを通じて、皆さんが自分なりの「楽しさ」、そしてその後の人生における自分なりの「目的」を見つけ、充実した学生生活を送られるよう、一人の先輩として願っている。